

研究区分	学部研究推進
------	--------

研究テーマ	海外授業及び海外フィールド・ワークの実践（継続）				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	小針 進
	研究分担者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	奈倉 京子
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	米野 みちよ
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	堀内 賢志
	発表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	小針 進

講演題目	コロナ禍の一段落で復活した海外授業の意義
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>【目的】国際関係学部旧アジアコース時代からの取り組みである。学部のアドミッション・ポリシーに序文に明記されている「国際社会で活躍できる人材の育成を目指す」や「21世紀型地球市民としての優れた人材の育成を目指す」といった目標を多分に意識しているものである。実践的な海外授業を実施する科目が設定されていないなかで、本プログラムでの実践は貴重なものとなっている。新鮮な国際感覚の獲得、直に触れる国際関係、異文化理解、多文化共生体験、危機管理・対応、留学・海外就職先の選択、習得言語の実践等において、海外授業の必要性から継続的に実施してきたのが、このプロジェクトである。海外協定校等との合同授業、各自のテーマに即したフィールド・ワークを学生と共に行うことで、これらを養うことを目的としてきた。</p> <p>【成果】コロナ禍の20・21・22年度において、本プロジェクトではオンラインによって、海外大学との交流を行ってきた。2023年は、学生たちと共に実際に海外へ出向いて、海外の交流協定校等との実質的な交流が復活した。小針の場合、東西大との対面による日韓学生合同セミナーを23年11月に実施した。この交流は1999年から実施しているもので、次年度で四半世紀となる。米野の場合、24年11月にフィリピン大学との対面による合同授業と学生による現地研修を実施した。他方、中ロ両国に関して、政治的な情勢もあり、対面による現地との交流を実施することができなかった。それでも、学生の国際感覚の獲得は待たなしであることに鑑み、奈倉の場合、学生らと東京・池袋の新興チャイナタウンでのフィールド・ワークを実施した。堀内の場合、学生らとロシア極東連邦総合大学函館校教授による特別講義の企画と、函館の日露関係史跡を見学する研修などを実施した。</p> <p>他方、海外学生を本学で受け入れて、本学で合同授業と静岡市内でのフィールド・ワークも実施した。小針の場合、中国東北3省からの9人と本学学生15人の間で日中合同ゼミを行った。</p> <p>復活となった直接的な海外渡航による対面授業の教育的効果は大きかった。現地での対話と実施による海外での同年代との交流は何よりも得難かったといった所感が多くの学生から寄せられた。また、日中関係が厳しいなかで、中国からの学生を受け入れて、本学での交流も試みる事ができた。</p> <p>【今後の展望】学部のアドミッション・ポリシーを具現化させるうえで、次年度以降も、引き続き海外渡航による合同授業、海外からの受け入れによる合同ゼミなどを実施して、学生たちの国際感覚を養成していくべきである。また、韓国とフィリピンだけでなく、政治的な情勢を見極めつつ、中国とロシアにおける海外授業も実施できるように、環境を整備していくべきである。</p>